

## 版畫工藝

私達日本人は、日本の櫻の版木を用ひ、木から作られた高雅なる日本紙を用ひ、東洋以外では作らうとしても作る事の出来ないバレンを使つて、版畫を作るうれしさを持つて居ます。

その嬉しさから、版木を用ひて種々なものに、種々の用途の為に、べたべた摺るのも亦嬉しいことでもあります。それでは版畫としてではなく、私はどんな風に版木を用ひたかといふと即ち次の如くであります。

紙に摺つたものでは、版畫を貼つた羽子板、年賀葉書、版畫を入れた書簡箋及び封筒、版畫を貼つた團扇、エキスリブリス、音樂會のプログラム装畫及び入場券。

布に摺つたものでは、帯、半襟、手携袋、窓掛、壁掛、卓子掛、風呂敷、長襦袢、裝飾手拭。

まだこの他に羽織の裏にも使へませう。しかし私はまだそれは作つたことはありませんです。

布に摺るには私は油繪具を用ひます。うすく解いて版木に塗り、布を疊の上におき、それに版木を當てゝ、動かぬやうに押えつけ、疊の目なりに版木と布と一緒に動かすのです。丁度普通の摺り方の逆にやるのです。疊が汚れると

いけませんから新聞紙か何かを下に敷きます。これは考へて居るだけで、やつたことはありませんが、染料に糊を交ぜ、摺つてから蒸して色止めをすればそれで立派な實用向きの捺染更紗が出来きるわけです。

とにかく嬉しいことであります。たとへ出来上つたものに不満があるにしろ、版を彫り又摺つたりして居る時には不満もありません。退屈な人生が救はれます。私の如き素人は自分の力も知らないで不満を感じるとは以つての他であつて、退屈な人生から救はれたことだけでも有難く嬉しいと思はなければなりません。不満を感じずるよりは自分の拙さを知るのです。顰め面をするのがあながち藝術ではないでせう。自分の力相應に楽しむのも亦藝術の徳でありますまいか。

(『HANGA』第12輯/1927(昭和2)年10月20日)